

JPASC *Ikusanga*

幾山河 *Newsletter*

Japanese Prefectural Association of Southern California

1661 W. Third Street, Los Angeles, CA 90017

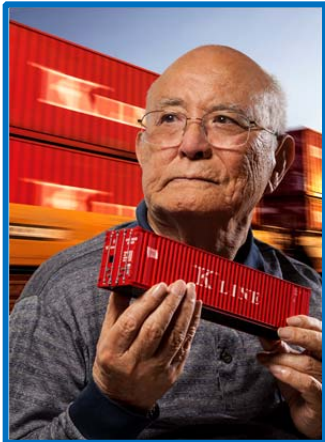


www.jpasc.org

人生に乾杯！ 協議会の人物めぐり-2

コンテナ輸送にかけた夢 —

「キャプテン・アサミ」として知られる浅見紳太氏
(南加埼玉県人会発足メンバー、同県人会長を経て現在顧問)



●お生まれは？
埼玉県入間郡川角村西戸(現在名は毛呂山町西戸)。父は小学校、中学校、高等学校の校長を歴任した。

●幼い頃の思い出は？
夏は近所の川で「ふんどし」で泳ぎ、秋には魚釣りを楽しんだ。ドジョウをえさによく鰻(うなぎ)をとったものだ。

●学校はどちらに？
旧制川越中学の後、東京高等商船学校に入学した。戦

時下のため、商船学校とはいえ海軍の一つの組織のようになっていた。現に二、三期前の人は出征し大勢が戦死していった。昭和20年3月の東京大空襲の時は、何十万人のたちが被災し、大勢の人が学校に避難してきて、戦争の悲惨さを体験した。

●最初の乗船とその後の航海士としてのご経験は？
昭和20年に、四等航海士としてアメリカのLSTという船に乗り、いわゆる「復員業務」の仕事をした。その後、川崎汽船に入社し、雪川丸、さらに二等航海士として太隆丸等に乗船。航海士としていろいろなことを学び実践を積んだ。

●初めての外国航路は？
1951年、二等航海士として雪川丸に乗船しバンコックまでの航路に従事した。積荷は、輸出では鋼材やセメント。輸入の米は、いわゆる生きてる植物なのでその輸送がどんなに難しいものかを学んだ。その後、1953年に国川丸で初めてアメリカにきた。サンフランシスコ、ロサンゼルス、パナマ運河を超えてニューヨーク往復の約4ヵ月ほどの航海だ。国川丸は川崎汽船が世界に誇る最優秀船の一つだった。その後アフリカやカリブ海航路などを経験した。

●「キャプテン・アサミ」と呼ばれたのは？
アラスカ州がアメリカの49番目の州になった翌年、私は本物のキャプテンになり、州知事やマリン・コーズの幹部と会議を重ね、厳しい気象のアラスカと日本との海上航路開設を成功させた。その当時から「キャプテン・アサミ」と呼ばれるようになった。

●コンテナとの出会いは？
ニューヨークで海務監督をしていた時に、ニュージャージーでの「コンテナ披露パーティー」に招かれた。その時、これからは全天候型のコンテナが主流になる、と確信した。1963年のこと。

●コンテナとロングビーチ港との関わりは？
コンテナ輸送の利点をなかなか会社(川崎汽船)に納得させるには大変だったが、会社は1972年にロングビーチ港にコンテナ・ターミナルを開設した。ITS(International Transportation Service Inc.)を設立し、2代目の社長に就任した。最初は15人の社員数だったが、1年後には75人、5年後には250人になり、全米最大の港運会社に成長した。

●内陸輸送に取り組みたいきさつは？
アメリカ東海岸と西海岸とのコンテナ輸送に取り組んだ。オレゴン州のタコマに目をつけ、広大な未使用の土地、鉄道の便、水深条件などが超大型船にも向いていると判断した。今ではタコマ港はシアトル港を抜き、太平洋岸の有力な貿易港に成長した。

●数ある業績の中で特に「挑戦」だったことは？
顧客を得るために、ワイフを連れて、フランス、ドイツ、イスラエル、スウェーデン、ノルウェイ等、各方面に行き顧客を集めたこと。オンドック方式によるコンテナの鉄道輸送を「四面楚歌」の中で成功に導いたこと。

●オンドックとは？
コンテナを船より直接貨車積みして輸送すること。それまではオフドック(港から離れたところにある鉄道ターミナルで貨車積みしていた)であったため、非常に不便だった。

しかしながら、一列車で200のコンテナトラックが減るといふ公害防止の点から賛成の意見が出て、数年かけてオンドックシステムが実現した。

鉄道線路の拡張、橋やトンネルなどの工事を経て、ついに1986年、オンドックDST(double stack train ダブル・スタック・トレイン)をシカゴ、ニューヨークに向けて強行にスタートさせた。1989年のロングビーチの公聴会では全員一致でオンドックDSTに賛成を得た。その後、ロングビーチ港はコンテナ取扱量ではロサンゼルスやニューヨークを抜いて全米最大の港に発展した。

●特に忘れられない思い出は？
1995年に、ロングビーチ港湾局や連邦政府より、“Father of On Dock Rail”という称号を頂いたことは生涯忘れられない出来事だ。またコンテナ思想普及のため、家内と二人で世界中を回って話し合ったことは忘れられない。

●もし商船学校に行かず、海運業に携わらなかったら？
法律に興味があった関係で弁護士になっていただろう。

●協議会のメンバーに伝えたいことは？
もっと規約を勉強して欲しい。

●今、人生を振り返って思うことは？
今は世界中の雑貨輸送がすべてコンテナを使用している。今まで自分が関わってきた仕事が社会に役立っていることを幸せに思う。それは家族と企業内外の多くの人たちの支持や助言のおかげと大変感謝している。1年で日本に帰ることになっていた私は、ロングビーチ港湾局の要求により半生をアメリカで過ごすことになったが悔は残らない。

浅見氏は現在90歳。奥様の敏子さんとは60年以上も苦楽をともになさっている。一人っ子だった浅見氏が3人のお子さん、7人のお孫さん、それに4人の曾孫さんに囲まれて本当にお幸せそう。K-Lineのモデルを写真家から渡された瞬間、浅見氏の目が、未来の可能性を今なおさぐるような凛々しいもの変わったことが印象的だった。ビジョンを持ち続けた勇氣あるビジネスマンのおはなし、ありがとうございました。
(インタビュー：マザ洋子 写真：Steve Crise)



幾山河について皆様からのご意見やご感想を Yoko.Mazza@Gmail.com までお寄せ下さい。幾山河はウェブサイトからダウンロードできます。
www.JPASC.org/media.html 幾山河をクリック。 幾山河編集部